

演題番号：C4

## 間質性肺炎に続発した自然気胸の猫の一例

○小山田希充, 尾形真佑, 久本真也, 長谷川哲也

加古川動物病院

1. はじめに：自然気胸は外傷性や医原性の原因を伴わない気胸とされ、プラヤブレブに伴って発生することが多い犬と異なり、猫ではアレルギー性気道疾患のような炎症性疾患に続発することが多いとされている。空気の漏出部位を特定するためにCTなどの画像検査が利用されているがその特定は困難なこともあり、41.7%の犬で術前の正確な特定ができなかったとする報告もある。今回我々は、空気の漏出部位特定のために、人医学領域において報告されている気管支造影検査を実施した症例を経験したため、その有効性について検討した。

2. 材料および方法：症例は6歳9か月齢、避妊雌の雑種猫で、呼吸困難および頻回嘔吐を主訴に来院した。胸部レントゲン検査にて胸水貯留が確認されたため胸水抜きし呼吸状態安定後にCT検査を行ったところ、左右肺前葉、右肺中葉の虚脱と気胸、胸水貯留を認めたが空気の漏出部位特定は出来なかった。第2病日に開胸下にて生理食塩水を用いて空気の漏出部位を探查するも左右の肺いづれからも空気の漏出は確認できず、胸腔ドレーンを設置し閉胸した。胸水を細菌培養検査及びFIP抗体検査へ提出したがいずれも陰性であった。

内科管理を第10病日まで行ったが改善を認めなかったため、気管支造影検査を実施した。

3. 結果：気管支造影検査では、右肺前葉の背側縁、右肺中葉の頭側縁に造影剤の漏出を認めた。右肺中葉と左肺前葉の再拡張が確認されたが右肺前葉は虚脱したままであったため、右肺前葉を空気の漏出部位として疑った。肺は全葉においてすりガラス陰影を認めた。第14病日に右肺前葉の肺葉切除を実施したが明らかな改善を認めず第16病日に死亡した。剖検後の組織所見は肺葉全体におよぶ間質性肺炎と右肺中葉からの空気の漏出が示唆された。

4. 考察および結語：本症例において、気胸の基礎疾患として間質性肺炎が確認された。間質性肺炎の原因として組織所見や臨床所見からウイルス感染や分類不能な特発性間質性肺炎を疑った。空気の漏出部位は、レントゲン検査やCT検査では特定できなかったが、気管支造影検査を行うことで病変部周囲への造影剤の漏出が確認され漏出部位特定に近づくことができた。今後、投与量の検討や気管支鏡を用いるなどの投与方法の検討によって改善の余地があると考えられる。